

第33回全国ホテル研究大会報告

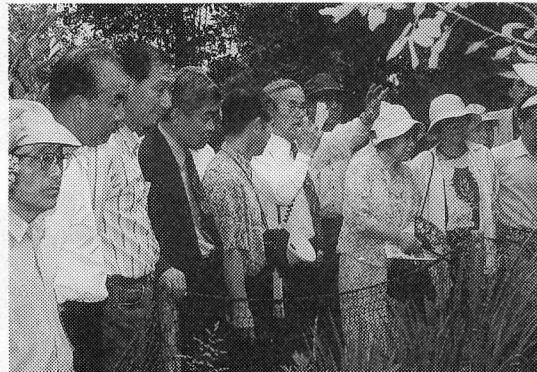
研究大会の概要

全国ホテル研究会の第33回大会が5月26～28日にかけて、全国ホテル研究会主催、守山市、守山市教育委員会共催、守山大会実行委員会主管、環境庁、滋賀県の後援により滋賀県守山市で開催され、会員や地元のメンバーなど3日間で延べ800名が参加しました。

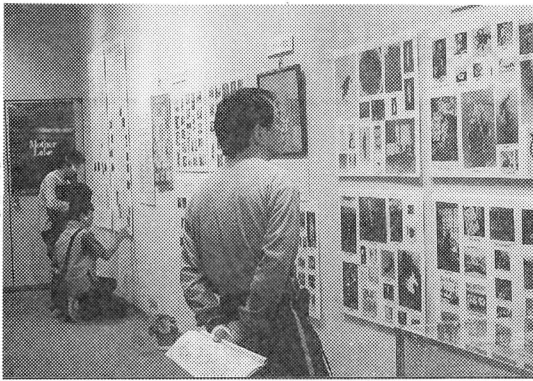
26日は昼から大会会場となる守山市民ホールで受付が行われ、玄関横の螢狩りをする親子の像が迎えてくれました。市民ホールのエントランスではホテルをイメージしたディスプレイが飾られ、奥の部屋では本会の初代会長でもあった故南喜市郎氏や守山ホテルに関する資料や赤野井湾流域協議会の活動紹介、守山市小学校部会の「ほたるのすめる自然環境をめざして」という発表、小学生が描いたポスターなどが展示されていて、大会期間中、会員や来場者が興味深げに覗いていました。13時から3つのグループに別れて見学会が行われ、それぞれ市民ホールに隣接する市民運動公園内のほたるの森資料館と人工河川、鳩の森公園内の研究所と人工河川、三津川を見て回りました。見学の後、一旦市民ホールへ戻り、大会議室で夕食をとり、座談会が行われました。あたりがすかり暗くなった20時に、再び3グループに別れて昼間の見学場所をそれぞれ見て回り、ゲンジボタルの光を楽しみました。市民運動公園は人工河川のすぐ近くを大きな道路が通って、頻繁に自動車のヘッドライトが差し込み、ホテルは少々棲みづらそうでした。鳩の森公園は人工水路の一部を覆ってホテル飼育舎にしていますが、多くのホテルが飛んでいました。中には幼虫が抜け出したものか、飼育舎の外でも飛んでいるホテルがいました。三津川は地元の



玄関横のモニュメント



見学会（市民運動公園内ほたる河川）



展示に見入る参加者

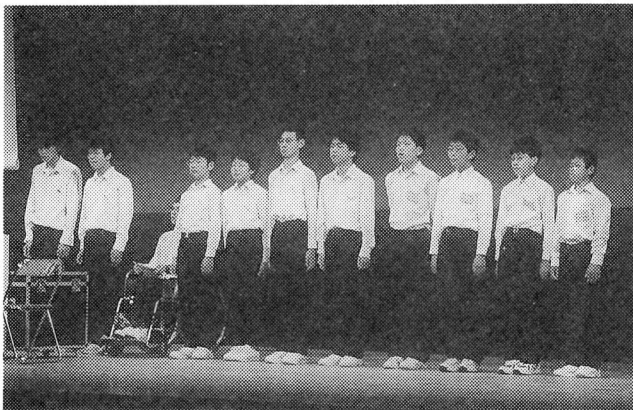


守山市小学校研究部会の展示発表

泉町内会が清掃活動等を行っていて、川のすぐわきの高層住宅では、川に光が射し込まないように、窓にすだれを置くなど地域ぐるみで協力しているしている様子が窺えました。

26日の開会式は圓谷事務局長の開会のことばに続いて、大場会長、甲斐道清守山市長、北村安雄守山市議会議員、川端弘守山市教育長が挨拶されました。

引き続いての研究発表は、午前中に5題、午後から7題が行われました。最初は「市街地に飛ぶホタルの謎にせまる」と題して守山市内の中学校4校の科学部が共同で行った研究を、代表として明富中学校科学部の生徒さんが発表されました。また、草桶秀夫さん他と鈴木浩文さんが、それぞれ各地のゲンジボタルをDNAで比較した研究を発表し、遺伝子レベルでは6つの集団が存在することを明らかにしました。これまでは発光パターンや生態的な違いから東西のゲンジボタルの移植が問題にされてきましたが、今後はさらに地域性を重視して、移植には細心の注意を必要とすることになります。さらに、韓国から農村振興庁農業科学技術院蚕糸昆虫部の金三銀さんが来日され、「低温処理によるヘイケボタルの休眠打破」という発表をされました。研究大会も今後、国際交流の場になっていけ



発表を終えた明富中学校科学部の生徒さんたち



韓国の金三銀さん

ればと思います。

研究発表の終了後、休憩をはさんで南喜右衛門氏を議長に総会が開られました（総会報告参照）。総会后、圓谷事務局長より閉会宣言が行われ、大会が終了しました。夕方からの懇親会は場所をホテルに移して、各々親睦を深めました。

27日は時間の都合で滋賀県立琵琶湖博物館のみの見学となりました。琵琶湖をテーマにしたこの博物館では、琵琶湖の自然や琵琶湖周辺の民俗など多方面からの展示がなされ、ホテル関係では、かつて琵琶湖周辺で使われていた螢籠の展示があり、とうがたったダイコンを繊維だけにして作った珍しい螢籠が印象に残っています。

大会テーマ：『琵琶の湖ホテル飛び交う もりやまの里』

会 場：滋賀県守山市 守山市民ホール

大会日程：

5月26日（金）

11：30～13：00 受付（守山市民ホール）

13：00～16：00 見学会（ほたるの森資料館およびほたる人工河川、鳩の森研究所
およびほたる人工河川、三津川）

18：30～20：00 情報交換（守山市民ホール）

20：00～22：30 ホテル観賞（ほたる水路、鳩の森ほたる水路、三津川）

5月27日（土）

9：30～10：00 開会式

10：00～16：00 研究発表

16：00～17：00 第33回総会

19：30～21：30 懇親会

研究発表：

市街地に飛ぶホテルの謎にせまる

守山市立明富中学校・守山北中学校・守山中学校・守山南中学校科学部

守山ホテル復活へ向けて 中島 耕

ゲンジボタルの一つの飼育方法とその広がり 吉川正信

鴨と螢の里づくりグループの活動について 口分田政博

「ホタルダス」(滋賀県)の10年調査から見えたもの	小坂育子
低温処理によるヘイケボタル <i>Luciola lateralis</i> の休眠打破 ...	金三銀・金鍾吉
新聞記事にみるホタルへの関心	遊磨正秀・永江秀作
ゲンジボタルの精蜜摂取の影響	山岡 誠
遺伝子から見たゲンジボタルの地理的分布	
	武部寛・吉川貴浩・井出幸介・窪田康男・草桶秀夫
ミトコンドリアDNAからみたゲンジボタル集団の遺伝的な変異と分化	鈴木浩文
ヒメボタルの餌 陸貝を野菜屑で増殖	西山 武
ホタルの擬態	大場信義

大会開催地より

第33回全国ホタル研究大会を終えて

大会実行委員長 南 喜右衛門*

初夏の夜空に輝くイルミネーション『ほたる』。

昔はこのような風景が全国各地で多く見られましたが、昭和の20年頃から工場の進出、農業の乱用により河川の汚れがひどくなり、ほたるが住めないようになってきました。

当時私の父、南喜市郎はほたるの卵を河川の岸に置いたり、孵化した幼虫の放流を試みましたがすべて失敗に終わりました。そこで何とかほたるを飛ばすことができないかと考え中、ふと床の間に目をやったところ水盤に綺麗な花が生けてあったのが目にはいり、この水盤でほたるを飼育することができないものだろうかと思いつき早速試みました。昭和26年のことです。

何度も失敗しては一年間棒に振り、このような歳月が進んで行きましたが、ふとしたことがきっかけで、白い水盤を使用したところ、ほたるの幼虫の様子が一同に分かるようになりました。小さな幼虫を筆でとり、新しい水盤に移し替えるのが父の日課でした。そしてついに昭和33年、世界で初めて人工飼育に成功しました。

その後全国各地からほたる愛好家が訪問され、研究成果を熱心に耳を傾けておられた。

こんな日が続いた。とうとう父も根を上げてしまいました。そこで二代目会長となる岡先生はじめ幾人かの同志の発案で、全国の愛好家を一同に集め研究会を開催することになりました。そして、昭和43年に第1回全国ホタル研究大会が守山で開催されましたが、当時守山には一匹のほたるもいませんでした。

その後各地に大会が回っている間、守山市がやっと重い腰を上げ昭和54年に守山ほたる研究会を発足していただきました。当時父の資料をすべて提供して進み始め、翌年鳩の森公園に人工河川とホタル研究室が建設され市の職員が常駐勤務してホタルの研究を始めました。しかし市民の方々はすぐにホタルが飛ぶと思い、非難を浴びながら研究を続けられました。

その後ふるさと事業の一環でほたるの森資料館が開設されると、市民の方々もほたるのいろいろな事が判るようになり、特に河川を綺麗にすることが一番大事であることが浸透すると、ゴミを川に捨てないで下さいとPRするよりも、『この川から蛍を飛ばしましょう』とPRした結果、ようやく4～5年前から一部の河川でほたるがやっと飛ぶようになりました。特に二津川の公園については自治会総出で清掃を行い、2000匹余りのほたるが初夏の夜空に乱舞するようになり、やっとほたるが帰ってきました。このような努力の成果を全国ホタル研究会の皆様方に見ていただきたく、第33回全国ホタル研究大会を守山で開催させていただきました。

おかげさまでたくさんの参加（大会参加者800名、各河川の観賞者が3日間で延べ約3500名）を賜り、成功裡に終了できましたことは全国ホタル研究会の皆様方のご協力とご支援を賜りましたお陰であります。この場をお借りして厚くお礼申し上げます。今後ともよろしくお願い致します。

* 守山市ホタル研究会会長

第33回全国ホタル研究大会を終えて

大会実行委員会啓発部長 中島 耕

全国ホタル研究大会の第1回大会を、昭和43年8月に守山市で開催して以来、32年ぶりに再び守山市で第33回大会を開催することができ、この上ない喜びであります。

北は北海道から、南は九州・沖縄、そして韓国からも遠路多数の会員、関係者など皆様のご参加により、意義ある大会に盛り上げて頂きほんとうに有り難うございました。心より厚くお礼申し上げます。

会場をお引き受けしてからは、不安や心配が先に立ち夜も眠れない日が続き大変でしたが発生危ぶまれたホタルが多少なりとも飛んでくれたことで、救われた思いがいたしま

した。

大会を迎えるスタッフ一同、お越し下さる皆様方に、良い思い出となるよう精一杯務めさせて頂きましたが、何分不慣れなため、受付、宿泊、発表、その他全般にわたり、ご迷惑をおかけしましたことと申します。何卒ご容赦の程お願い申し上げます。

守山大会は市政施行30周年記念事業の一環として、開催させて頂きました。大会本番の研究発表では会員他合わせて600余名のご出席を頂き、いずれも興味深い素晴らしい内容の研究発表をして頂きました。

また懇親会においても多数の会員の皆様にご出席頂き、時間の過ぎるのも忘れるほどに話の輪が広がり、多くの笑顔を見ることができました。さらに江州音頭では、舞台上で音頭取りの鐘や太鼓に合わせ大勢の方々が踊って頂いたことで、会場が最高潮の雰囲気となり大変うれしく思いました。

最終日、施設見学（琵琶湖博物館）の案内を終え、駅までお送りした後それまで張り詰めた糸が切れ、体内に風穴があいたような気持ちとなり力が抜けましたが、無事大会を終える事ができ一生の思い出となりました。守山大会参加の皆様ほんとうに有り難うございました。

最後になりましたが、2001年山形県米沢市で開催される第34回大会の成功を、祈念申し上げ御礼の言葉とします。

第33回全国ホテル研究大会を終えて

大会実行委員会事務局長 中西 雅次*

去る5月26日から3日間に日程で開催されました「第33回全国ホテル研究大会守山大会」には、全国各地から多数ご参加いただき、開催地を預かりました事務局としては、閉会后数ヶ月を経た今日においてもなお喜びと安堵に浸っております。

このたびの研究大会は、昭和43年に本市で第1回の大会が開催されて以来33年ぶりの“里帰り”となり、あわせて本市の市政施行30周年を記念する事業として意義深い大会でありました。

とりわけ、今年度を実施される30周年記念事業の中でも、トップバッターを飾る事業としてその成否が注目されておりましたので、意義深さとあわせて責任の重さもひとしおでありました。

そのような中、研究大会が盛況のうちに幕を閉じることができたのは、ひとえに会員皆さま方をはじめ、大会本部事務局の皆さま方のご協力の賜物と感謝いたしております。本当にありがとうございました。

さて、本市が、かつて全国的に名を馳せたもりやまボタルを蘇らそうと、“ほたるの住む町ふるさと守山づくり事業”を開始して以来10数年を経過しました。

その間、試行錯誤や数々の失敗を経ながらも、今日に至ってようやく市街地の数河川で安定した数の発生を見ることができるようになりました。

最初の頃は市民の間でも理解を得にくかった事業ではありますが、今日では、ほたるの生息環境を守り、創造していこうとする市民意識は、静かに、着実に広がりつつあります。

そして、環境の世紀といわれる21世紀を目前にした今、ほたるを切り口にした環境保全意識の高まりは、河川環境だけにとどまらず、多様な生物の生息環境を含めた、より総合的な環境保全意識への高まりへと変容しつつあります。

こうした時勢下にあって開催された今回のホタル研究大会は、33年前のホタルにまつわる研究者の集まりから始まって、二巡目にふさわしい、人と自然の共生を謳いあげる環境保全意識の高揚の場となりました。

私ごとで恐縮ですが、今から70数年前に本市の故南喜市郎氏（本大会の実行委員長南喜右衛門氏の父）が蒔かれた種が、着実にしかも確固とした足取りで生長していく様子を、大会の事務局という立場でつぶさに感じられたことは幸せでした。

今後も、会員の皆さま方におかれましては、ホタル研究を中心に、環境の世紀といわれる21世紀の指針を示す灯台となられますようお願いいたしまして、御礼方々ご挨拶と致します。

* 守山市役所環境経済部環境課長

全国ホタル研究大会に参加させてもらったの感想

高橋 春弥*

第33回全国ホタル研究大会当日、僕たち明富中学校科学部の部員全員の顔は、緊張感でいっぱいでした。「発表は、市民ホールの大ホールでします。」と、事前に顧問の先生から連絡があったけれど、大会前日のリハーサルで、発表の練習を大ホールですると、あまりにも広すぎて、ビックリしました。ものすごく広いという事だけで緊張しているのに、今日はお客さんが1,000人近くもいる！しっかり発表できるのだろうか？と少し不安に思っていました。でも、小さな声でボソボソ言うよりかは、堂々と大きな声で発表したほうがかっこいいぞ！！と、部員みんなで励まし合いました。

「次は、守山市内4中学校科学部の発表です。」と、司会者が言ったとたん、「よ～し！がんばるぞ！」と、みんなで声を掛け合いました。

発表途中、いくつかつまったりしたところがあったけど、自分も含めてみんな堂々と大

きな声で発表できてよかったと思います。また、こんなに大勢のお客さんの前で発表するという事は初めだったので、このことは、僕たち科学部員にとって貴重な体験となりました。

僕たち明富中学校科学部が学んだことは、ほかにもたくさんありました。その日は、僕たちの発表以外にも、ホタルのことについての発表がいっぱいありました。それらの発表の中には、「あっ！すごいな！」「こんなことも明富中学校科学部でしてみたいな。」と思うものもありました。

とてもうれしいこともありました。それは、北九州からこられたビオトープを設計されている方が、僕たちの取り組んでいる学校ビオトープを見にこられたことです。「このビオトープをさらによくするにはどうしたらいいですか。」と、僕たちが質問すると、設計士さんは、「ここをこうするといいよ。」「ここはこうしないとだめだな。」と、親切に教えてくださいました。

今回、僕たちが研究した内容は、市内4中学校科学部の力だけでなく、市役所の方、調査をしにいった地域の方、市内4中学校の生徒の方、赤野井湾流域協議会の方など、いろいろな方のご指導・協力があつたからこそ素晴らしい研究内容になりました。さらに、今回の全国ホタル研究大会に参加してこれから明富中学校科学部で取り組みたいことなど、多くのことを学び、ホタルに対する知識や関心がさらに深まりました。

第33回全国ホタル研究大会に参加させていただきありがとうございました。

* 守山市立明富中学校科学部部長

新刊書の紹介

□昆虫と自然、2000年6月号（35巻7号）

ニュー・サイエンス社、2000年6月発行、1,300円

※特集／ホタル－保護とその問題点として、「ゲンジボタルの飼育と保護」（勝野重美）、「陸生ホタルの現状について」（小俣軍平）、「ゲンジボタルの胚子発生」（小林比佐雄）の3編が掲載されている。